

つである。しかし一方で、環境保護活動家、科学者、また政治家達により、これらの人類によりもたらされる地球環境への悪影響への解決策をいかに見出そうとするかについての多大な取組みが行われてきた。1972年年初にローマクラブが『成長の限界』をレポートとして発表以来、国際的な諸組織が『持続可能な開発』の概念を支持し、国際社会も環境破壊と資源開発という問題に目を向けた。また、1992年にリオデジャネイロで開催された地球サミットと1997年の京都会議の二つは産業界の戦略を持続可能性と地球環境保護に適合させるための重大な意志決定であった。今日、持続可能な開発の延長線上の問題、すなわち経済開発、社会開発と環境保護の両立は重大な関心事である。都市と自然の保護のため、更には廃棄物管理のために、エネルギー分野における革新的なプログラムを実行に移す必要がある。廃棄物に関しては、発展途上国における国内発生の廃棄物の内20～50%が制度的に収集されていない。一方で、欧洲においては毎年40万トンの危険物を含む13億トンの廃棄物が発生しており、廃棄物管理上の解決策と計画的な制度の開発の重要な課題となっている。世界情勢を鑑みた場合、政治的、社会的また経済的な緊急事態を決定する過程での対立とともに政治的、社会的危機が出現している。今日、われわれはかつてないほどに、問題対応性、専門性そして、新たな緊急事態に向けての注意力を必要としている。ISWAはこれまでに培ってきた戦略を踏襲するのみならず、戦略的な方針と効果的なプログラムを共有する事によって、持続可能な廃棄物管理のための主導的な役割を拡大し強化する事をも求められている。ISWAは唯一の国際的な、独立した非政府組織として、1972年以来環境、経済そして社会的な観点を勘案して国際的な持続可能な廃棄物管理を推進してきた事により、持続可能な廃棄物管理手法の開発に参加するという重要な役割を帯びている。

4. ISWA活動のマニフェスト（活動指針）

ISWAの活動指針として以下の10項目から

なるマニフェストが提案され、総会で採択された。

- ①廃棄物管理の与える人間の健康と環境負荷を軽減させるような、持続可能な廃棄物処理手法の普及推進
- ②発展途上国におけるISWAの活動強化
- ③持続可能な廃棄物管理に積極的に取組む他の国際的な組織及び機関との連携強化。（特に、社会及び環境のニーズの分野における連携強化）
- ④特定の経済的、社会的な状況を勘案した場合の効果的な手法・技術に関する情報と経験の交流促進
- ⑤政府職員、専門家、現場技術者を組織し技術の交流と研鑽を目指した学術・教育活動の強化
- ⑥国家あるいは地域の開発戦略を踏まえた新しい地域開発プラン創造への貢献
- ⑦より多くの先進国が、効果的且つ包括的な運用可能なプログラムを国際会議に提案する事の促進
- ⑧ISWAの活動基盤である戦略的な方向性に従い廃棄物の排出抑制策の提供
- ⑨廃棄物の削減のみならず、リサイクル及びエネルギー回収をも促進するための活動を特徴とする総合的な廃棄物管理制度を確立するための地市民参加への支援
- ⑩最善の実施法を確実なものとするため、廃棄物管理における専門家の認定プログラムの継続



ローマ総会で採択されたマニフェスト

5. 分科会のプログラム

分科会は18日から20日までの三日間にわたって、7箇所の会場に分かれて開催された。

分科会は24のセッションに分かれ、発表総数は264にのぼった。日本からは岡山大学の田中教授をはじめとして、北海道大学、名古屋大学、広島大学、鹿児島大学などの大学の研究者に加え、国立環境研究所、更には当工業会の会員である（株）タクマなど民間からの発表者を含めて合計13論文の発表があった。発表のテーマとしては、開催地であるイタリアでの廃棄物処理に関するもの、また欧州域でのバイオ関連や廃プラスティック処理に関するものが目立った。また、ISWAのマニフェストにも含まれている、所謂発展途上国での廃棄物処理に関する論文発表も多く、その中には、途上国での無秩序な廃棄物処理に対する法整備、ルール作りの支援や技術及び技術情報の提供などに関する発表もあり、グローバルな視点に立った、NGOとしてのISWAの

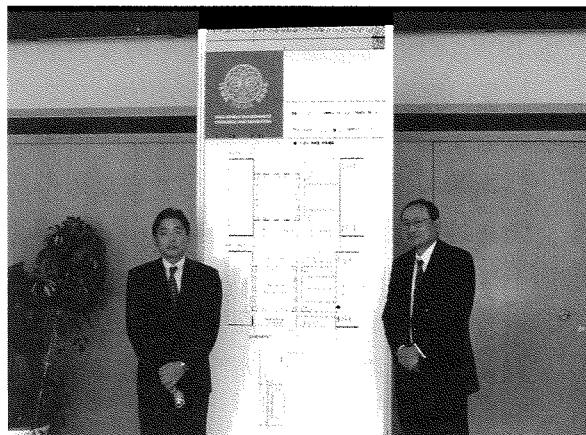
存在を再認識した。日程の制約上一部の分科会にしか出席できなかったが、研究者や民間企業からの出席者からも活発な質問が出されていた。

尚、発表者のプレゼンテーションはパワーポイントを使用するものが多く、言語は英語が原則となっていた。イタリア語でのプレゼンテーションの場合には同時通訳が行われており、会場内で貸し出されるヘッドフォンセットで聞くことができた。

6. 展示会

展示会場には、主催者であるISWA本部及びイタリア支部のブースを含めて合計39のブースが設けられ、夫々が個性を競いあつた展示を行っていた。出展者はISWA本部以外に缶類、紙類、容器類のリサイクル団体、更には欧州を中心とする民間企業であった。

展示の言語はイタリア語表示が多く、こちらは国際的な展示を意識するよりも、むしろ



分科会会場の案内板の前にて



展示会会場にて

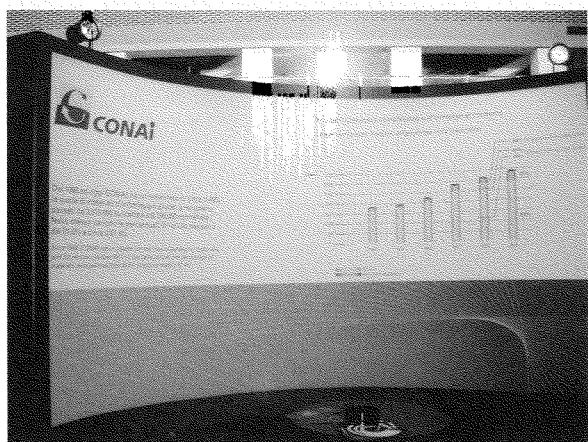


分科会会場にて



展示会会場にて

見学者の多数を占めたであろうイタリア人を主な対象とした展示であった。展示会の性格上 NGO としての ISWA の立場とコマーシャルなものとの共存を目指さねばならず、コンパニオンを使ったビジュアルな展示はなく、その意味では決して派手さのない展示会場ではあったが、充分力のこもった展示会場であった。また、冒頭に述べた、当工業会がスポンサーとなった大会のプログラムや表彰された優秀論文を収めた CD ROM もこの会場内で配布されていた。



展示会会場にて、容器リサイクル協会の展示

7. 所感

今回の総会での印象に残った言葉として、<持続可能な資本主義> “sustainable capitalism”

と<持続可能な廃棄物管理> “sustainable waste management” があった。1992年にリオで開催された地球サミットでの<持続可能な開発> “sustainable development” というある意味ではプリミティブな概念から 12 年を経て、資本主義とその活動の結果として排出される廃棄物の処理にも持続可能なものを求めねばならないという時代になった事を改めて認識した。また、新会長である NC Vasuki 氏がその就任スピーチの中で、『廃棄物管理産業は絶対に原料不足のない産業である。しかし、一方でソリューションがないと言えない産業でもある。』との言葉があり、廃棄物管理の技術を提供する側の人間として身の引き締まる思いがした。最後に今回の視察は非常に有意義なものであり、団員の中で多数の参加希望者があったにもかかわらず、木下専務とともに総会に出席させて頂けた事を紙面を借りて感謝申し上げたい。尚、来年の小会議はアルゼンチン プエノスアイレス再来年はデンマークのコペンハーゲンで開催される予定である。

追記：総会では、ラトビアとタイが ISWA のナショナルメンバーとして承認され、34 ナショナルメンバーとなった。

(調査担当：木下正明、赤澤由起夫)